



# SAKURA

第 41 号

平成 30 年 3 月 20 日 発行  
桜地区社会福祉協議会

# 社協だより

市制120周年記念

## 鯉の放流式が盛大に開催されました。



10月1日(日) 智積町「西勝寺」前の「智積養水」で桜地区では記念行事として鯉の放流式が開催されました。

西勝寺境内に15cm~30cmほどの鯉が400匹ほど用意され、屋台などもたち、300名以上の参加者や見物人などで賑わいました。

智積養水のほとりにには舞台が設営され、開会式は勇壮な太鼓の演奏で始まり主催者挨拶に続き、1匹ずつバケツに入れられた鯉を子供たちが一斉に放流すると鯉たちは元気に水路へ泳ぎ出しました。



古くから農業・生活用水として大切にされ、単なる「用水」ではなく命を養うことから「養水」という文字を当てられ、昭和30年代には水車も敷設されていましたが、高度成長期に汚染が進んでしまいました。

それを憂いた住民達が浄化活動に立ち上がり、昭和47年に初めて鯉を放流し、清掃などを現在まで続けた結果「鯉の泳ぐ水路」として1985年(昭和60年)環境庁より「日本の名水100選」に認定されました。



前回の放流式は30年前の1987年(昭和62年)、もし30年後に放流式が開催されたならば、今回参加した子供たちは「お父さん、お母さん」になっていることでしょう。

### 桜在宅介護支援センターからのお知らせ

市役所に代わって相談業務を行う公的な相談窓口です。  
桜地区は、桜在宅介護支援センターが窓口です。

高齢者の生活や  
介護の相談は

☎059-326-6618へ  
お気軽にお電話ください!



桜地区の人口 15,105人

世帯数 5,926世帯

男 7,358人

女 7,747人

平成30年1月31日現在

# 今年も元気いっぱい！ 「さくらふれあいまつり・ミニ運動会！」

(桜地区社会福祉協議会・福祉部主催)

11月5日(日) 桜小学校体育館にて「さくらふれあいまつり・ミニ運動会」が開催されました。

参加者は「英水苑」、「サクラノ園」等のお年寄りや、「障がいを持つ子と親の会・のびっこ」の子供たちなど総勢100名以上、まずは準備運動で体をほぐし、大玉転がし、玉入れ、借り物競走と続く競技に「ガンバレ！ガンバレ！」と声援を送り、楽しく熱戦を繰り広げました。

3年連続で参加している元盲導犬のウィットが今回はライオンにコスプレし、子供たちと一緒に競技に参加したり、お年寄り写真と撮ったりとスタッフの一員としてお手伝いをしました。

後半は懐かしい歌を皆さんと一緒に歌い、民生委員さんによるダンスクラブ「SDK48」の皆さんのキュートなダンスに合わせて踊ったり、楽しいプログラムが続きまして。

爽やかな秋空に応援や笑い、歌声の響く楽しい一日を企画、準備、お世話いただいたスタッフの皆様感謝いたします。ご参加の皆様お疲れさまでした。



**史跡探索** (桜地区社会福祉協議会・文化部主催)

## 「日本名水百選・智積養水を訪ねて」

11月12日(日) に開催された史跡探訪は智積養水にまつわる歴史を尋ねるコースでした。

午前9時、40名ほどの参加者が3班に分かれ出発し、「八幡神社と山の神」、「教尊法師の碑」、「旧神森駅付近の路線跡」を通り、今回のメインである、智積養水の水源地「蟹池」へ到着しました。

「蟹池」は小さいながらも湧水量は豊富で、蟹が泡を吹くように湧き出る様子からこう呼ばれるようになりました。

ここの湧水は神森地区を潤し、「二分八分」という分水地で二分は神森東、八分は智積地区へと流されています。

その後、桶管で金溪川を潜らせていますが、その桶管を「三十三間筒」と呼び、明治17年編の智積村地誌に、「正徳元年(1711年)松平藩代官・石原清左衛門正利が官費を以て伏せ替えた」とあります。

この辺りの風景は「大井掘り」(川掃除)で見たことがあるという方もおられ、その後、鯉の川・智積養水を辿りながら、ゴール地点の西勝寺境内の「引石」へ向かいました。

身近な灌漑用水路にも、美しい水と共に先人達の知恵や努力の長い歴史が流れていることを知った有意義な一日でした。

### 今回のコース

「八幡神社と山の神」→「教尊法師の碑」→  
「旧神森駅付近の路線跡」→「蟹池」→  
「二分八分」→「三十三間筒」→「引石」





2016年(平成28年)12月に始まった地域力アップ講座『咲楽』も、「私たちのまちを知ろう」から第2弾の「耕そう」に発展し、今年1月13日(土)に5回目を終えて終了しました。

今年度の流れは、

- ①四日市大学長 岩崎泰典氏の「これからの住民主体活動とは」の講演
- ②有識者3人のトークによる「住民主体型活動が地域を耕す」
- ③④すでに市内で実践している地域の活動報告(中部・三重西・下野地区)と、市社協からのアドバイス
- ⑤グループで「私たちのできること」を4グループに分かれて話し合う  
となりました。

岩崎先生は2025年問題(団塊世代が後期高齢者となる)に触れ、要支援の高齢者を地域の住民たちで支援していく「地域包括ケアシステム」を強調されていました。

有識者3人によるトークでは、昨年4月から市の総合事業に移行させ、その中で「サービスB」(要支援1・2と基本チェックリスト該当者を対象に、住民自らが活動して地域らしいサービスを作っていくこと)が大切になると強調されました。

市内で実践されているグループの発表で共通していたのは、高齢者を孤独にさせず、良い人間関係の中でコミュニケーションをとり身体を動かすことを勧めていることで、それによって元気な高齢者の生きがいにもなっていることでした。

最後の5回目では、各テーマごとのグループによる話し合いで具体的な方法が提案されました。

今年6月からは桜ボランティア協会が「サービスB」の活動を始めるということなので、実際の「住民主体型活動」が始動することになります。

## 福祉セミナー 1月21日(日)

# 「在宅医療について学ぶ」

講師 中嶋恒雄氏(桜台1丁目 中嶋内科 院長)



中嶋先生は桜台で40年間内科医として開院され、現在も現役で治療に当たっておられます。お世話になられた方々も多いことでしょう。

75歳とは思えぬほどお肌の色つやもよく、ユーモアあふれる表情で、早速認知や運動のトレーニングを促されました。数の足し引きや皮膚マッサージ等を聴衆とともにされ、皆をリラックスさせてから本題に入られました。

在宅で高齢の方々を介護する場合、人生の最期を迎えるときにはどんな症状があるのか、そしてどう対処したらいいのかと不安を抱えている方も多いのではないのでしょうか。



昨年末の全国調査で、四日市市は死因として老衰死が女性で全国第1位、男性で全国第3位であることがわかりました。老衰死とは、いわゆる白然死=枯れていくように死亡していく、ということです。

死が近づいてきた時の症状として、意識低下・食欲減退・誤嚥・せん妄・尿失禁等、老衰によると思われるいくつかの症状が見られます。死が近づいてきた時、家族はあわてて医師や救急車を呼ぶのではなく、手を取って静かに見守ってあげてほしいそうです。

中嶋先生は、在宅で自然な形で最期を迎えられることを望んでおられました。困ったことがあれば、桜在宅介護支援センターへ相談してくださいとのことでした。

